



埋文だより

第85号

令和3年8月5日発行

国内最古級と判明！ 弥生時代の船の一部を発見！！



写真は、南さつま市金峰町にある中津野遺跡なかつのいせきで出土した、弥生時代前期末(約2,500年前)に作られた、船の部材じゆんこうぞうせん げんそくばん(準構造船の舷側板)です。船の部材としては国内最古級のものと判明しました。よく見ると、板に開けられたほぞ穴や切り込みなどの加工が施されており、当時の木工技術の高さがうかがえます。

この船に乗って、東シナ海で漁をしていたのでしょうか。それとも他地域との交易に利用されていたのでしょうか。非常に貴重な発見となりました。

目次

- ・国内最古級の舷側板…………… 1
- ・中津野遺跡について…………… 2
- ・万之瀬川流域の弥生時代の遺跡…………… 3
- ・新刊報告書紹介…………… 4
- ・河コレ遺跡めぐり(② 別府原古墳群)…………… 5
- ・令和3年度 発掘調査予定遺跡…………… 6

中津野遺跡について

中津野遺跡は、南さつま市金峰町中津野に所在しており、国道 270 号線（宮崎バイパス）改築に伴い発掘調査が行われました。調査期間は、平成 18 年～平成 21 年、平成 25 年～平成 29 年の 9 か年に及びます。

中津野遺跡は、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世と様々な時代の遺構・遺物が発見されている複合遺跡です。特に、縄文時代後期（約 3000～4000 年前）の遺構・遺物が多く出土しました。このほか中世のものともみられる、湿地に植物の葉や枝を敷いて、地盤沈下を防ぐための敷粗朶も発見されました。これらの結果をまとめた発掘調査報告書は、令和元年度に台地部編を刊行し、今後、低地部編を刊行予定です。

今回紹介する船の舷側版は、弥生時代前期ごろのもので、弥生時代のものとしては、他にも北部九州に由来を持つ夜白式土器や板付式土器、在地の弥生土器である高橋式土器などが出土しました。

また、磨製石鏃、石包丁、鍬の持ち手の部分と思われる木器等も出土しています。



中津野遺跡位置図



縄文時代後期の土器



敷粗朶の検出状況



湿地での発掘調査の様子

日本最古級の船の部材

今回発見された舷側板は、準構造船（丸木舟に、舷側板や仕切り板を組み合わせて作られた船）の一部です。調査区北側の泥の中から発見されました。この場所は低湿地になっており、掘ると水がしみ出てくる場所でした。通常、木材は微生物の働きによって分解され、ほとんど残らないのですが、周りの水や泥が木材に触れる酸素を遮断したおかげで、ほぼ当時のままの状態出土しました。

使用されている木材は、榎であることが分かりました。榎は水やシロアリに強く、仏像や碁盤の材料などに使用されますが、水に強いことから、船の部材にも適しています。

大きさは最大幅 30cm、最大長 272cm、最大厚 5cm です。直径が 3～5cm の穴が 15 か所開けられ、切れ込みが 6 か所あります。おそらく船の強度を上げるためのほぞ穴や板を固定する切れ込みであったと考えられます。

また、この舷側板の前部と後部には、他の部材がつけてあったと考えられており、船全体の全長は 6～7m になると推定されています。



準構造船の舷側板

万之瀬川流域の弥生時代の遺跡

南薩を代表する河川である万之瀬川^{まのせ}の流域には、数多くの遺跡があります。弥生時代の遺跡も多く、この時代の様相を知ることができる重要な遺跡がいくつもあります。それらの遺跡をピックアップして、紹介します。



万之瀬川流域の弥生時代の遺跡地図

- ① **高橋貝塚** 万之瀬川支流の堀川の右岸にあります。遺構は堅穴建物跡 1 軒、土坑 2 基が検出されています。遺物は弥生時代早期から後期までの土器が出土しています。特に弥生時代前期の土器はこの遺跡を標式として、高橋式土器と呼ばれています。他にも、磨製石器（石剣・石鏃・石包丁など）や管玉、南島産のゴホウラという貝で作った貝輪や獣骨で作られた釣針などが発見されました。
- ② **阿多貝塚** 令和 2 年に国史跡に指定されました。縄文時代前期が中心の遺跡ですが、弥生時代の土器も出土しています。特に弥生時代後期頃の、甕棺葬を行ったと考えられる遺構や、堅穴建物跡が 4 軒発見されています。
- ③ **松木菌遺跡** 加世田平野に突出するシラス台地の先端部にあります。弥生時代後期の遺跡で当時の土器が多数出土しました。この時期の土器編年に大きな影響を与え、松木菌式土器の標式遺跡となっています。
- ④ **下小路遺跡** 高橋貝塚から 300m ほど北にあります。2 つの土器の口縁部を合わせてつくられた棺の中に、遺体を埋葬した甕棺墓が発見されました。甕棺墓の中からは成人の右腕の骨とともに、ゴホウラで作られた貝輪が出土しました。
- ⑤ **持鉢松遺跡** 標高 4 m ほどの自然堤防上にあります。弥生時代の遺構は、堅穴建物跡 5 軒、土坑 6 基、溝状遺構 5 条が検出されています。遺物は刻目突帯文土器や、入来式土器、山ノ口式土器、松木菌式土器、中津野式土器と弥生時代早期から後期にわたる土器が出土したほか、熊本系の黒髪式土器や北部九州系の須玖式土器が出土しました。他にもガラス玉や鉄製品が堅穴建物跡から出土しました。



高橋貝塚出土の貝輪



持鉢松遺跡出土土器

新刊報告書紹介

昨年度、県立埋蔵文化財センターでは7冊の発掘調査報告書を刊行しました。その中で、今年2～3月に開通した都城志布志道路関係の発掘調査報告書3冊を紹介します。

縄文時代の建物跡 一 牧B遺跡（曾於市末吉町）一

令和元年度に調査された遺跡です。標高は210mほどで、シラス台地の縁辺部に立地しています。主に縄文時代早期と縄文時代後期、弥生時代を主体とした遺跡です。

縄文時代早期では、燻製を作る際に使用したと考えられる連穴土坑が1基見つかりました。遺物数は少ないながらも、石坂式土器、下剥拳式土器、手向山式土器、塞ノ神式土器、打製石鏃、スクレイパー、打製石斧、磨石などが出土しました。

縄文時代後期では、堅穴建物跡が1軒検出されました。建物跡からは後期後葉の中岳Ⅱ式土器が軽石とともに多数出土しました。当時の住居構造や中岳Ⅱ式土器の変遷の過程を考える上で、興味深い発見となりました。



都城志布志道路と遺跡位置



縄文時代後期堅穴建物跡(牧B遺跡)

縄文人のおしゃれアイテム 一 原村遺跡（曾於市末吉町）一

原村遺跡は、平成29年度から30年度にかけて調査が行われました。牧B遺跡の700mほど南のシラス台地縁辺部に立地しています。遺跡は旧石器時代から近世まで、様々な時代の遺構・遺物が発見されましたが、主に縄文時代早期と縄文時代後期、古代のものが多数発見されました。

縄文時代早期では、集石41基、堅穴建物跡2軒、連穴土坑2基、落とし穴2基が見つかりました。遺物は、岩本式土器、加栗山式土器、平楯式土器など様々な型式の土器が出土したほか、アクセサリーとして使用されていたと考えられる環状の磨製石製品が出土しました。中央部の穴には、ひもを通していた跡や穴を開けるについた線状痕が確認されました。縄文時代後期では、堅穴建物跡2軒とそれに伴って中岳Ⅱ式土器が多数出土しました。



環状の磨製石製品(原村遺跡)

縄文人が歩いた道？ 一 見帰遺跡（志布志市志布志町）一

見帰遺跡は平成25年度と30年度に発掘調査が行われました。西側に安楽川が流れる台地沿いに立地しています。旧石器時代、縄文時代早期・中期・後期、弥生時代、近世の遺構・遺物が発見されました。

旧石器時代では細石刃文化期のもと考えられる磨石・敲石が出土しました。縄文時代後期では、幅約1.5mの溝状遺構が検出されました。おおそ東西方向に伸びています。床面には硬化面が確認されたことから、当時道として使われていたと考えられます。



縄文時代後期の溝状遺構（見帰遺跡）

河コレ遺跡めぐり

河口貞徳氏の歩んだ遺跡 ②別府原古墳群（さつま町永野）

鹿児島県立埋蔵文化財センターでは、県考古学会の会長を長年つとめられた故河口貞徳氏の寄贈資料を整理する事業に取り組んでいます。『埋文だより』では、これまで河口氏が取り組んだ代表的な遺跡調査を振り返り、貴重な遺物や発掘当時の様子等を紹介したいと思います。みなさんもぜひ遺跡のあった場所を訪れて、先人の暮らしに思いを馳せてみてはいかがでしょうか・・・。

別府原古墳群は、さつま町永野に所在します。さつま町役場薩摩支所から、国道104号線を溝辺方面に約1.6kmほど進むと、右側に見えてきます。標高は160m程度で、周囲に茶畑が広がるのどかな場所です。遺跡の南側には川内川の支流、穴川が流れています。

昭和42年に県道50号線の付替工事が行われ、現場から古墳2基が発見されました。土器・鉄剣が出土しましたが、工事に伴い2基の古墳は消滅してしまいました。その後、昭和44年2月に、薩摩町教育委員会（当時）から河口貞徳氏に、遺跡を発見した県道に隣接した畑から、農作業中に古墳が発見されたと連絡があり、同年3月23日から29日までの7日間、同年4月18日から21日までの4日間、計11日にわたる発掘調査が河口氏、上村俊雄氏らによって行われました。

調査の結果、地下式板石積石室（石棺）墓と呼ばれる古墳時代の墓が6基発見されました。地下式板石積石室墓は、地表から堅穴を掘り、この堅穴の底に板石や平らな石を積み上げて石室（石棺）をつくり、そこに遺体を埋葬し、さらにその上に板石を積み上げて遺体を覆う墓です。熊本県の八代海沿岸や、宮崎県えびの市などの大淀川上流部、鹿児島県では出水市や長島町、川内川流域で見つかっています。

石室（石棺）の大きさは一番小さいもので110cm、大きいもので157cmで、平均は130～140cm程度でした。この大きさでは伸展葬（体

を伸ばした状態で埋葬する）は難しく、おそらく屈葬（手足を折り曲げた状態で埋葬する）であったと考えられています。

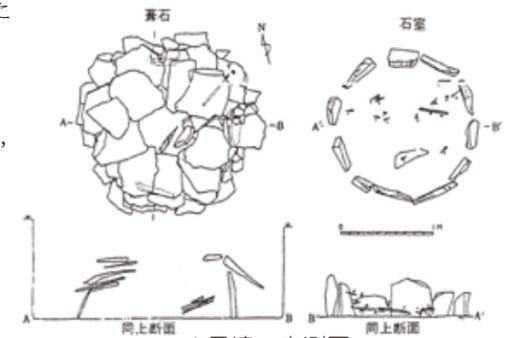
副葬品は1号墳と6号墳では鉄製の短剣・長剣、鉄鏃、3号墳では鉄剣、鉄製大刀、鉄鏃が出土しました。6号墳で出土した長剣は、長さが58cmあり、本遺跡で最大の鉄剣です。また6号墳から出土した鉄鏃の多くは腸抉鏃と呼ばれるもので、逆刺があり殺傷能力を高めたものです。遺物などから、別府原古墳群は、およそ5世紀末から6世紀ごろのものと考えられています。

当時、地下式板石積石室墓の性格について、「隼人の墓制」や「部族の集団墓地」など、様々な意見があったようで、河口氏はそれぞれの考えについて、報告書内で記述しています。河口氏自身は、他の地下式板石積石室墓の事例を収集して、弥生時代後期の土坑墓から地下式板石積石室墓が発生したと考えたようです。

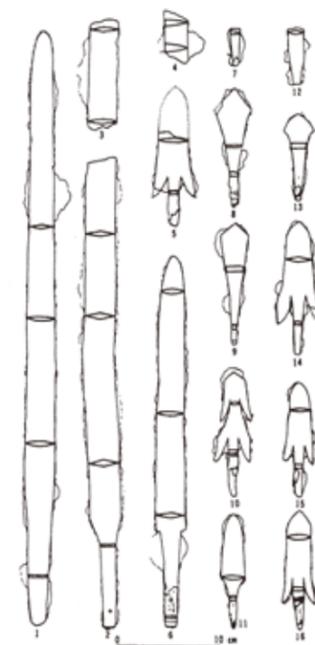
鹿児島の考古学をリードし、精力的に調査されてきた河口氏ですから、「工事で破壊されてしまった2つの墓も調査したかった・・・。」と思っていたかもしれませぬ。



現在の別府原古墳群



1号墳 実測図



6号墳出土の鉄剣・鉄鏃

